

\*「ホレーシェ」とは、チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



## 待望のコンバイン導入と ナタネの収穫 !!

5月31日、「南相馬農地再生協議会」設立総会を迎えたその当日、待ち望んでいた収穫機「コンバイン」が、関係者一同見守る中、無事に届けられました。あの3.11を機に、私たちは自然環境も地域社会もことごとく壊されてしまい、大きな戸惑いと空しさの日々を過ごしてきました。そうした中、今ここに多くの方々の支援協力により、1歩ずつ前向きに取り組む気持ちが生まれてきたこと、そして何といっても私たちと一緒に身を投じて支えてくださる皆様に、改めて深く感謝いたします。今、放射能測定センター・南相馬「とどけ鳥」による、放射能汚染調査資料を参考にしながら、農業地域社会の再生への道を模索しつつ、その第一歩を「菜の花プロジェクト」として位置づけ、動き始めました。



<待望のコンバインによるナタネの収穫>

ナタネ栽培は昭和30年代頃に、私たちの地域でも自家用食油の確保として普及し、春には黄色く色づく菜の花畑の風景が記憶に残っています。しかし現在は、遺伝子組み換え作物の輸入や、農薬・化学肥料・ポストハーベスト、そして放射能汚染と、多種の問題を抱えています。少しでも前向きな立ち直りの選択肢として、私たちは今、このプロジェクトに賭けて邁進する覚悟で立ち上がりました。

地域社会を担う若い世代は、避難先での生活を選択する中、今後、郷里に戻ることも容易でない事態が続くことが想定されます。現在もまだ、3.11以前の人口(71,500人)の36%に当たる人々が、郷里を離れた生活を送っています。ただ、プロジェクトの動きの中に、明るい協力者も現われました。地元農業高校の学生の皆さんです。それは、ナタネ油の商品開発(ラベルのデザイン考案)への協力ですが、とても若い世代の感性に満ちた想いに驚きました。そして、一緒に地域再生に取り組む機会がくれたことは大変意義深く、パワーも湧いてくる瞬間に希望が見える思いです。

地域社会を担う若い世代は、避難先での生活を選択する中、今後、郷里に戻ることも容易でない事態が続くことが想定されます。現在もまだ、3.11以前の人口(71,500人)の36%に当たる人々が、郷里を離れた生活を送っています。ただ、プロジェクトの動きの中に、明るい協力者も現われました。地元農業高校の学生の皆さんです。それは、ナタネ油の商品開発(ラベルのデザイン考案)への協力ですが、とても若い世代の感性に満ちた想いに驚きました。そして、一緒に地域再生に取り組む機会がくれたことは大変意義深く、パワーも湧いてくる瞬間に希望が見える思いです。

自然環境・地域社会の再生を目指す中で、「循環型地産地消」の生活環境を基礎とする取り組みを、今後とも模索していく決意です。  
(南相馬農地再生協議会 代表 杉内清繁)

〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞 3-8-10 愛知労働文化センター B1

**NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部**

銀行 名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部 (店番号 150)

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 原 富男

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-732-7172 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>



チェルノブイリ救援



＜収穫した菜種について①各圃場の土壌 ②茎 ③根 ④菜種 ⑤菜種油 ⑥搾り滓の測定を行うので、それぞれ手作業で分別します。＞

## 「とどけ鳥」日誌

(小林 岳紀)

早いもので、2012年6月1日に測定センター「とどけ鳥」が開設され、2年以上が経ちました。南相馬市における放射線量の分布状態を可視化するマップ作成も、第7回を数えるに至っています。2013年4月からは、浪江町が警戒区域の見直しにより一時立入りが出来る様になり、新たに浪江町の線量マップ作製も行っており、第3回を数えています。南相馬市での測定結果を見ると、2011年7月の第1回から2013年11月の第6回までは、順調に線量数値が低減してきましたが、今年4月の第7回の測定では低減傾向が止まり、場所によっては増加しているケースも見られました。これは、半減

期が約2年である『セシウム134』が、相当程度減少してしまい、低減効果への寄与が少なくなった為でしょうか。これからは、遅々として下らない線量と付き合っていく行かなければならないのでしょうか。地域の皆さんに、少しでも現状を判りやすい形でお知らせするためにも、この活動を続けたいと考えております。次回の測定は、「10月19～20日」と「10月25～26日」の4日間を予定しています。測定ボランティアへの参加者を募集していますので、詳しくは同封のチラシやホームページをご覧ください。

食品類・土壌・水などの測定サービスに関しては、今年4～6月までの3ヶ月間で646件の依頼を受けました。稼働日数52日間で、1日平均12件強となっています。測定結果については、日々の主だった結果をブログにアップしている他、月毎に整理を行った結果も併せてアップしています。このところの測定結果から、『野菜類』については、食品基準値の100Bq/Kgを超過する検体は全く見られず、10Bq/Kgを超過する検体も殆ど見られない状況となっています。反面、『果樹類』や『山菜類』については、昨年と比較して明らかに低い数値を示していますが、突出した数値を示す検体が散見されます。いわゆる『不検出』のレベルから100Bq/Kgを超える広い範囲に、分散する結果となっています。このような結果から、『山菜類』はセシウムを吸いやすいと言えるのでしょうか。同じ種類の植物で大きな数値的な乖離を生ずる事を、単に土壌のセシウム濃度の影響だけで済ませられるのでしょうか。生育している土壌の性質により、セシウムを吸い上げる程度が異なり、施肥の状況でも大きく変わるそうですので、どなたか実証的な実験などにより解明していただけないでしょうか。

測定センターがある南相馬市では、平将門の時代から千余年続くとされる『相馬野馬追(のまおい)』を中心に、鎧兜・陣羽織の武将装束で500以上の騎馬が参加する、勇壮なお祭りがあります。当測定センターでは、その『相馬野馬追』をデザインしたタオルの製作・販売に協賛しております。祭礼のハイライトでは、「神旗争奪戦」が行われます。「神旗争奪戦」は、相馬中村神社・太田神社・小高神社の神旗が仕込まれている花火を打ち上げ、落下する神旗を数百の騎馬武者が馬上で奪い合う勇壮なものです。その各神社を表す「赤・青・黄」の三色のタオルがあります。ご希望の方は当センターまでご連絡ください(数に限りがありますので、品切れの際にはご容赦ください)。

当測定センターの愛称は『とどけ鳥』ですが、今年の春頃から当測定センターには『白セキレイ』が頻繁に来る様になりました。当初は、ヤマザキのリッツや小鳥の餌を与えていましたが、生餌である『ミル・ワーム』を与えだしたら他の餌には見向きもしなくなり、最近では事務所の中まで入り込み、餌をねだる始末です。直接、手から餌をついばむ姿に可愛さが増します。今では当測定センターのマスコットの存在です。



＜生餌をねだる白セキレイ＞

詳しくはブログで写真などを確認してください。

## 総会 & チェル救デーを終えて

6月28日、ウィルあいちにて定期総会を開催しました。今回の議長は、理事長の原さん。

堅苦しいことが苦手な原さんには前日、善意のカンニングペーパーが用意され、練習をしてから総会に臨まれたそうで、予習の甲斐あり無事に役目を終えられました。

総会では、2013年度の活動報告・決算報告、そして承認。つぎに2014年度の活動計画の説明をさせていただきました。

### 【2014年度 活動計画より】

#### ■ホステージ基金とナロジチ地区の医療支援、そして菜の花プロジェクト

ホステージ基金のキリチャンスキーさんが亡くなってから1年。代表を引き継いだドンチェヴァさんは、チェル救とホステージ基金がパートナーとなったときからのスタッフです。チェルノブイリ問題に長年携わった人材として、内外ともに欠かせない人です。今後も彼女を柱にナロジチ支援などを行っていきます。また大規模化が予定されている菜の花プロジェクトもホステージ基金の支えを必要とし、チェル救もサポートを継続していきます。



#### ■とどけ鳥・汚染マップ、そして菜の花プロジェクト

春・秋と行っている汚染マップ作成のための測定。測定隊員募集と同時に定員が埋まるほどの人気の事業です。しかし、「三井物産環境基金」の助成が終了し、今後の資金源が危ぶまれるなか、チェル救は継続を決定しました。

とどけ鳥も、検体が減少傾向にあるものの、オフィスは「南相馬の汚染悩み相談室」の様相で活気に溢れています。そして、いよいよ本格稼働する「南相馬農地再生協議会」の菜の花プロジェクトにも、とどけ鳥は欠かせません。

2014年度も、チェル救は菜の花づくしで、チェルノブイリと福島の実災者に寄り添っていきます。応援よろしくお願いします！

### 【チェル救デーのご報告】

今回のチェル救デーは3本立てです。まずは、中京TVの情報番組で5月に放映された、南相馬菜の花プロジェクトの特集のビデオ上映。続いて神谷さんの「とどけ鳥最新情報」の報告です。多忙な神谷さんに代わり、とどけ鳥のK氏が作成したパワーポイントによると、とどけ鳥は飲み会が主な活動では!? と、思わせる内容。どうやらK氏は「とどけ鳥の裏事情」というテーマと勘違いしたのでは?との憶測が流れました。

しんがり原さんの「郡山バイオガス工事奮闘記」。

総会の議長とは打って変わって、生き生きと、3か月におよぶ工事の詳細を語ってくれました。

原さんはこれで3基のバイオガスを建設した実績の持ち主となり、南相馬でのバイオガス建設でも、原さんの経験が生かされることは間違いなしです。

参加者が少ないことが残念です。来年はちょっと総会をのそいでみませんか。

(市原 佳代)



## 「土地再生、菜の花ツアー」に参加して

(清水 孝子)

まず、チェル救の放射能測定センターで説明を受けた。不安の中の地域の人々にとって、最も頼りにできる場所なのだろうと思った。

測定所のみなさんの車に分乗し、各地を案内していただいた。女川へ3度行ったが、行く度に、がれきがなくなり、新しい建物もできていた。それに比べ、南相馬で見たものは、海からはるか遠くの野原、いや以前は耕地であったかもしれない所に転がっているいくつもの船。津波で破壊された多くの家屋など、津波被害そのままの景色が続いていた。

測定所の小林さんは、小高駅前で、旅館をやっていたという。ここは、昼間は入ってもいいが、寝てはならないと言う線量の高い所。「駅前の通りは、無人のため色がない。だから駅前通りに花を植えている。」と言う。遠くから越してきた若者が、小林さんに共感し、花の世話を手伝っている。その青年が地元の女性と結ばれ、赤ちゃんもできたとのこと。その3人家族も、ちょうど花の世話をしているところだった。その花とブルーシートの乗った小高の駅舎が収まった写真で、絵葉書を作ってくれた人がいるというので、その絵葉書をいただいた。

駅に隣接した自転車置き場には、あの日から、持ち主が現れない自転車がびっしりと並んでいた。その持ち主一人一人は、今さまざまな地域でご苦労なさりながら、変わってしまった人生を歩み始められたのだろうと思った。小林さんは、「旅館を再開するため、家の修理をしている。大工不足で、計画通りに事が進まないが…」と、話された。胸がキューンとなるような話と、そこで生きて行くというたくましい希望のお話に感動した。

夕食をいただいた民宿「翠の里」の女性は、「生き方を考え直した。草木染めをしているが、足元のタンポポであっても、とても美しい色に染まる。もっと自然に感謝しなくてはと思っている。お金は何の役にも立たない…」と言われた。宿泊した民宿の方は言われた。「除染は、放射能を移動しているだけだ。あの黒い袋の置き場も決まっていない。線引きで、被災者が分断されている。被災者同士をいがみ合わせて、為政者に矛先が来ないようにすることは、水俣であれ、なんであれ一緒だ…」と、激しい憤りを示された。

ここで見た新聞「福島民報」の1面トップの記事。6月21日付は、「福島の自殺者が被災県の中で最多」、6月22日付は「除染基準転換に賛否」だった。他にも、放射能関連記事がとても多い。読者の要望に応じて新聞は作られている。

測定所で販売されていたナタネ油。「高い！」としか思わなかった私。菜種畑での杉内さんの熱いお話を聞いているうちに、「購入しなくては…」と思い始めた。「消費者と生産者が繋がって、食を考えていきたい」と言う。今、安ければいいと言う風潮に私自身もなっている。菜種から油を絞る両親を、幼い私は家の土間で見た記憶がある。ほとんどの物を自給自足していた両親の生活から、なんでもお金を出せば手に入る生活に、たったの一代でなった。そして膨大なエネルギーを使った生活をしている。エネルギーがどれだけあっても足りない。エネルギー消費を減らしていきたい。

バスで、走っても、走っても、原野と人の住まない家並みが続いた。こんなに国土が消滅した。判決文「豊かな国土と、そこに国民が根をおろして生活していることが国富であり…」が思いだされた。帰りの新幹線で見、早苗の揺れる田んぼの美しかったこと。今後の活動として、私は「今回見たことを、写真展の開催で、広く人々に伝える。」

同行した友人は、「ナタネ油を販売する」と語り合い、お世話になった方々に感謝しながら家路に就いた。



〈あの日のままの自転車（小高駅）〉



〈駅前通りの花〉

福島原発事故から3年がたって、日本は脱原発どころか再び原発依存と原発推進の道を歩もうとしている。主導しているのは、原発依存症から抜け出せない立地自治体と、政府・財界である。福島の放射能被ばくをあたかも影響ないがごとくに宣伝し、現実の被害を風評だと主張して被害者を傷つける。原発推進にとって、放射能被害はあってはならないからである。事実を目をつむり、経済優先の社会に向かって進めば、また悲劇は起こるだろう。脱原発への道はどうしたら良いのか。

### 民意は脱原発、しかし…

政府がどう言おうと、世論調査では80%が脱原発である。しかし今、民意を政治に反映できるチャンネルはない。国政選挙が2年先にしかないことを良いことに、国会議員は、真面目に原子力とこの国の未来を考えていない。もちろん、安倍政権が秘密保護法や集団的自衛権など矢継ぎ早に打ち出す政策に振り回され、原発のことなど過去のことのように考えざるを得ない事情もある。先の参議院選挙で、すべての政党が脱原発を訴え、結果的に原発問題は争点にならなかった。先の都知事選もしかりである。こうした事実を考えれば、国政レベルで脱原発を争点化できなければ、この国は原発から脱却できないのは明らかである。政治が民意と離れている限り、脱原発はできない。

### 運動の限界を自覚しよう

福島原発事故以来、国内ではいつもどこかで脱原発デモと集会が行われている。それが民意の表れであり、政治に声を届ける手段の一つであることは間違いない。しかし今、この国の政権党はこの声に耳を傾けなないどころか、首相官邸前のデモを「テロ行為」と決めつけた政治家さえいる。

運動は世論を喚起し、脱原発のすそ野を広げるには必要だが、それが国家の政策に反映されるには大きな距離があることを自覚しよう。運動と政治の距離を縮める必要があ

る。それは何か？ 政治家が運動に対して危機感を持つような仕組みがなければならぬ。それをどうしたら構築できるのか。抽象的だが、民主主義の再構築しかない。民主主義において、国民一人一人が政治に関心を持ち、民意と政治の距離が近いことは必須条件である。今のこの国はどうだろう。「政治は自分と関係ない」と多くの市民は諦めている。明日の生活がどうなるか、が最大の関心事の人々にとって、政治がどうなるかが関係ない。こうした状況は政権党にとって大歓迎である。こうした状況を作ることによって、政府は民意を無視して暴走できるのである。

### 選ぶ政治から作る政治へ

政治は選挙でしか変わらない。しかし今、日本では「いったん選んでしまえばあとは政治家の自由」という、「お任せ民主主義」が蔓延っている。その結果、投票率の低下という悪循環が起こる。「お任せ民主主義」では世の中は変わらない。政治家が運動に危機感を感じるようであれば、運動は理想を実現できない。脱原発のために、「選ぶ政治」から「作る政治」に転換しよう。政治家を自分たちの中から育てて行こう。個々の運動が大きく連帯し、脱原発と平和を政治の争点にすることが求められているのではないだろうか。

2014年7月23日 (河田)

## 特集!! 「日本をとりもどす マツリゴト day」を振り返って

(兼松 真梨子)



2014年6月1日—まるで真夏のような暑さだったこの日、伏見にある白川公園は、気温にも負けない熱い一日となりました。4ヶ月前、最初に「未来につなげる・東海ネット」に、「何か一緒に大きなイベントをやしましょう」と話を持ちかけた時から、全く想像もつかないくらい人もマルシェもお金も集まりました。来場してくれた人、マルシェやステージ参加者としてイベントと一緒に盛り上げてくれた人、それぞれ

れがどのようにこの「マツリゴト day」の目的や意図を理解してくれたかはわからないけど、皆同じように、今の日本の行く末を危惧し「何かしなければいけない!」と思っていた人たちであることは間違いありません。そして、それは決してコアな一部の間人ではないことを実感しました。まだ選挙権がない高校生や子ども達、またそのお母さんたち、そして音楽と平和を愛する人たち…。もちろんバリバリの活動家も。みんな普通の人たちです。わたしの友達もたくさん来てくれたし、おばあちゃんは差し入れに笹団子と飲み物を持って駆けつけてくれました。すごく嬉しかった!!

今回のイベントは初めての試みで、かなり手探りの中、実行委員会は本当に迷走しました! 目的は明確でした。「民主主義をとりもどそう!」…原発にしろ、集団的自衛権にしろ、憲法の問題にしろ、反戦にしろ、沖縄の基地問題にしろ、貧困問題にしろ、今の政治が(というよりずっと今までどの時代も…かもしれないけど) どんどん私たち一般市民の感覚や声から遠ざかり、ないがしろにされている。民意が政治に反映されない。そんな世の中、これでいいの??という声をあげなければ!…。そして、とりわけ若い人たちが政治に無関心なことも、課題の一つでした。でも、これからの日本を創っていくのはまさしく私たち世代から下。20代30代の若者が政治から離れてしまえば、どんどん一部の人の声だけが拾われてしまうから。この若者層とどのようにつながっていくのか、それは今回のイベントの最大の課題でもありました。そのために、ゲストを誰にするのがいいのか、なかなか決まらずに(もちろん相手側のスケジュールや意向もあり) 時間だけが過ぎていった最初の2ヶ月は、今からしてみればすごくもったいなかったようにも思います(とにかく若者を集めたくて「SKE48を呼んでみる」なんていう案も出たくらい!)。ようやく三宅洋平氏をメインゲストに、と決まったのが3月の終わり。他のサブゲストも含め、チラシを印刷するまでに内容が詰まってきたのは4月中旬でした。広報期間が1ヶ月半という短い中で、本当に多くの方が集まってくれたと感謝と驚きでいっぱいです。赤字覚悟のイベントだったけど、多くの方が賛同してくださり、当日のカンパも加えたらなんと黒字になりました! ポレーシエ読者の皆さまにもご協力いただき、本当に感謝申し上げます。

私は当日「カンパ隊隊長」として、会場をレインボーアフロで練り歩きました。楽しかった! この「マツリゴト day」実行委員会は、6月19日の反省会をもって解散しましたが、今後この「マツリゴト day」をどうつなげていくのか、また広げていくのかは課題でもあります。当日ブースを手伝ってくれた方の中で、「マツリゴト day」を振り返って、「参加した人も参加しなかった人もこれからどうするか」と、集まって話をしているようです。若者は何も考えていないわけではないのですね! 内に秘めた想いは、みんな多かれ少なかれ持っています。きっとこれから、この「マツリゴト day」の想いがつながって形になっていくでしょう! またその時は、私も何かお役に立ちたいと思います!

☆当日の様子は、「日本をとりもどすマツリゴト day」ホームページから動画もご覧いただけます。近々、スピーチの内容もアップ予定です! 参加できなかった方は是非ぜひご覧ください☆

(<http://www.matsurigoto-day.net/> または マツリゴト dayで検索!)

こんにちは。3月までチェル救でインターンをさせていただいた諏訪です。

6月1日(日)、名古屋市栄の白川公園にて、「日本をとりもどす マツリゴト day ~原発・平和・くらし すべてのいのちと未来のために~」が行われました。「雨よ、降らないで!」という皆様の思いが強すぎたのでしょうか。天気は晴れ、焼けるほど暑かったです。

(本当に微力ながら、実行委員として関わらせていただきました☆)



### 【当日スケジュールの紹介】

#### 第1ステージ 11:00- <演奏、地元で活動している方たちのお話など>

—小向定さん(演奏)

#### —テーマ1 原発問題

小野佳奈さん(福島からの避難者) / 山口幹太さん(海旅 Camp) / 原富男さん(チェルノブイリ 救援・中部) / 西英子さん(反原発東海市民の会)

—マチルダマーチ(演奏)

#### —テーマ2 戦争・平和

小山初子さん(あいち沖縄会議) / 諸岡英実さん(俳優志望) / 飯尾ゆうすけさん(高校生) / 山本みはぎさん(不戦へのネットワーク)

—板谷信彦さん(演奏)

#### —テーマ3 くらし

奥田祐子さん(ワーキングウーマン男女差別をなくす愛知連絡会) / 藤井克彦さん(反貧困ネットワークあいち) / 岡田夫佐子さん(愛知・日本軍「慰安婦」問題の解決をすすめる会賛同人)

—江口晶さん(演奏)

#### 第2ステージ 13:00 - 16:00 <トーク&ライブ>

—坊さんバンド G・ぷんだりーか(お寺の住職で結成されたバンド)

—中谷雄二さん(弁護士、秘密保護法に反対する愛知の会共同代表)

—広田奈津子さん(映画「カンタ! ティモール」監督)

—三宅洋平さん(トーク・演奏、日本アーティスト有識者会議代表)

—マツリゴト Day メッセージ(原発事故避難者・母親の声)

—三宅洋平と 1000 人セッション ~Talkin'bout a Revolution~



MC 真野明日人さん 天野いつかさん

パレード 白川公園→本町通→広小路通→柳橋交差点→錦通→名駅通→名古屋駅前

マルシェ 食品や手作り品の販売、作品展示、ワークショップ、活動紹介など 70 を超えるブース

「マツリゴト day」に参加し、ステージで話す人、演奏する人、マルシェに出店する人、イベントに遊びに来た人、ボランティアに来た人…こんなに暑いのに、これからの暮らしを真剣に考えている人たちがこんなにもいるのかと驚き、私個人としては「果たして自分はここまで真剣だろうか」と考えさせられました。

イベント終盤の「1000人セッション」では、会場に足を運んでくださった一人一人が楽器を鳴らし、「マツリゴト day」一番の盛り上がるの様子を、ちゃっかりステージの上から見させていただきました。

近い未来をよくするためには、今から少しずつでも、身の回りに起きていることに目を向け、生活をしていく中で出来ることから変えていこう! そんな思いが伝わってくるイベントでありました。

「ゲストは自分ではなく、イベントに参加してくれたみんなじゃないのか。」今回メインゲストとして呼び出した三宅洋平さんが、イベント前の打ち合わせで言っていた言葉の意味が、「マツリゴト day」を振り返り、自分の中で改めてじっくりきたような気がします。

私もゲスト、日々の暮らしから変えていこう…。(諏訪 ひかり)



## 〈郡山 バイオガス工事奮闘記(完結編)〉

(長野県 南箕輪村 原 富男)

「にんじん舎の会」の「バイオガス・放射能吸着装置」が完成しました。工事は、1月6日から4月22日までかかりました。今、闘いのような日々を終え、工事で遅れている畑仕事と本業の「便利屋」の仕事にいそしんでいます。寝ても覚めても、バイオガスのことしか頭になかった郡山での日々が、今では思い出になろうとしています。

### 発酵槽中のモルタル・セメントミルク 3重塗り

工事終盤は、発酵槽内のモルタル塗りとセメントミルク塗りにてこずった。発酵槽の内部(床・天井・壁)に、モルタルとセメントミルク(セメントを水で溶きペースト状にしたもの)を交互に3層塗るだけの作業だが、簡単なように見えて神経を使う仕事である。特に天井は、水分量が多いと折角塗ったものが一度に剥がれ落ちるため、悲惨な事態となったこともあった。作業は、一層塗り終えたら乾くまで一日待たねばならず、天候や気温によって乾燥が遅い時もあり、作業時間が読めない辛さがあった。



### 緊張の瞬間 水密検査!

モルタル塗りなどの作業を終え、発酵槽の中に10m<sup>3</sup>の水(ドラム缶50本分)を入れてみる。水位を記録して、翌日見に行く。この瞬間は、「大丈夫」と思っているにも緊張する。水位に変化なし(水漏れなし)。水密試験合格の瞬間だ!

### メタン菌の確保と豚の流行性下痢(PED)

発酵槽の準備が整ったので、発酵槽に入れるメタン菌を探しに行く。豚農家のし尿槽から「ぶくぶく」泡が出ているのを発見。これを利用することにした。ところが運搬当日、「いわき市」で豚の流行性下痢が見つかり、県内の豚舎への立ち入り禁止と、糞・し尿等の移動禁止通達が出てしまった。このままでは、いつまでもバイオガスの運転が出来なくなってしまう。仕方なく伊那の小野寺さんにメタン菌入りのバイオガス液肥400L(ドラム缶2本分)を分けてもらい、長野県から6月2日に運搬した。

### 管理小屋とガス配管工事

管理小屋は当初、隣の鶏小屋の空きスペースを利用する予定だったが、鶏小屋が夏季には高温になるため、急遽、外に作る事になった。しかし、余分な予算はないので、古い単管パイプを使って組立て、壁は透明なプラスチックと金属の浪板で覆ってみた。配管は、発酵槽から取り出したガスパイプを小屋に入れ、ウクライナから持ってきたガスメーターにつなぎ、ペットボトルと透明なパイプで作った圧力計を繋ぎ、手製の脱硫装置もセットした。最後に発酵槽・加圧槽などの点検口に鉄板製の蓋を作るため、鉄板を買いに行った。長野県で3,300円/枚の鉄板が、郡山では4,500円/枚もするのには驚いた。仕方なく、伊那に戻った時に購入し、郡山まで運んだ。高値の原因は、復興需要にあるようだ。バックホーが借りられなかったことや資材の高騰など、福島県内は異常事態になっている。

### 工事を終えて

伊那にいては仕事が途切れなく入ってしまい、工事に着手するタイミングを失ってしまう。そのため、今年の正月明け、強引に郡山に引っ越して工事をはじめた。終わってみて、「工事は水物」の感を強くしている。現場の土質、排水、大雪、機材の調達、慣れない土地での生活など、いろいろな問題が起こった。その地方・現場ごとに事情は違うのだから、しっかりした事前の準備の必要性を痛感している。しかし、様々なトラブルを経験することによって得られたものは、次の工事に役立つ。この貴重な経験を、次の南相馬での工事で活かしたいと思う。また、「にんじん舎の会」からは、この装置を作って本当に良かったと言ってもらえるように、今後もサポートをしたい。

7月中旬「にんじん舎」から報告があり、少し「ガスが出始めた」という。現在、原料を定期的に入れ、安定したガス発生を目指している。

工事期間中、大勢の方々の励ましをいただき感謝しております。ありがとうございました。

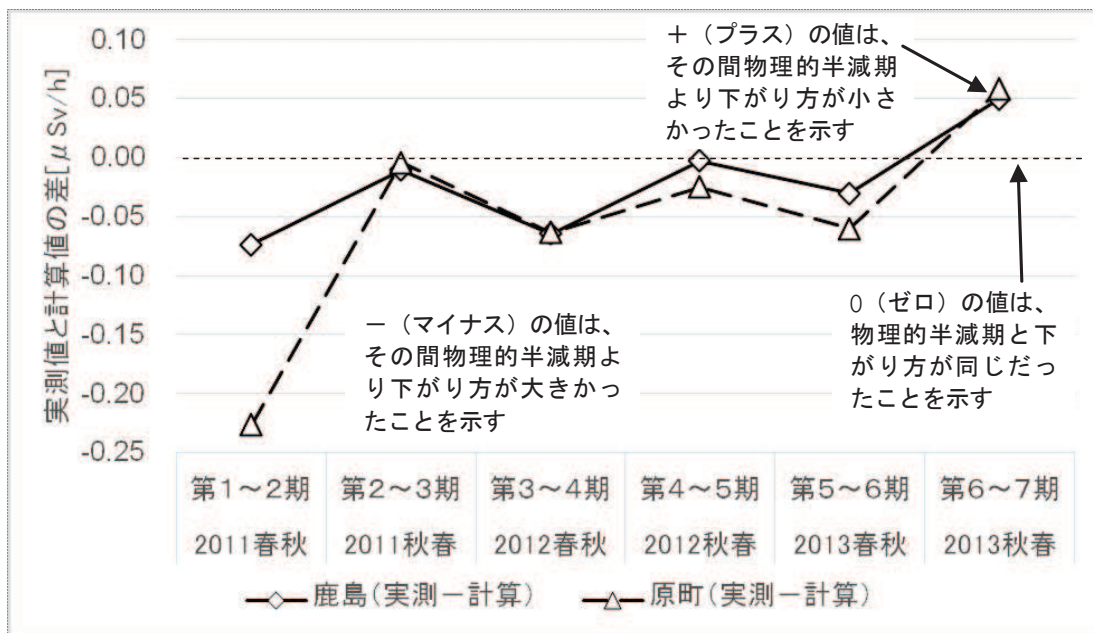


## 続 第7期(第14次・15次) 空間線量率 測定結果の考察

(池田 光司)

前号で、第7期の空間線量率測定結果から、南相馬市の鹿島区・原町区・小高区および浪江町、いずれの地区も前回(昨年秋の測定)から空間線量率が下がらなかったことをご報告しました。昨年の秋までは、物理的半減期の約2倍の速さで下がってきていたのに、なぜ、今回の測定では下がらなかったのでしょうか。原因を特定できてはいませんが、今回は、データをもう少し詳しく分析した結果と、それから考えられることをご報告します。

【図1】のグラフは、原発事故直後の第1期(2011年7月)から継続して測定している鹿島区と原町区のブロックにおける、半年毎の実測値と物理的半減期から予測される計算値との差を、地区毎に平均してその推移を示したグラフです。このグラフから、次のことが分かります。



【図1】 半年毎の「ウェザリング(雨や風による放射能移動)効果」の大きさ

- ① 原町区では、事故のあった春から秋にかけて、物理的半減期より空間線量率が大きく下がった。
- ② いずれの地区も「秋→春」に比べて、「春→秋」の空間線量率の下がり方が大きい。
- ③ 今回(第6→7期)は、いずれの地区も、物理的半減期では下がるはずだった空間線量率が、逆に上がった。

通常、空間線量率の下がり方が物理的半減期よりも大きくなるのは、ウェザリング効果によると言われています。ウェザリング効果とは、地表付近にある放射性セシウムが、雨によって地中に沈んだり、雨や風によって別の場所に流されて拡散したりすることで、その地点での空間線量率が下がることを言います(放射性セシウムは移動しただけで、それ自体が減っている訳ではありません)。このウェザリング効果から考えると、【図1】の結果に対して、次のようなことが考えられます。

- ① 事故直後は、放射性セシウムはより地表に近いところにあり、土と一緒に風で飛ばされたり、雨で流されたりしやすい。その影響が、原町区で強く出た。
- ② 春→秋の方が、秋→春よりも雨が多く、空間線量率の下がり方が大きかった。

しかし、③の結果の説明は困難です。ウェザリング効果は、通常、空間線量率を下げる方向に働くからです。空間線量率を上げる方向に働く、今までとは逆のウェザリング効果があり得るのでしょうか。ブロック毎のデータをさらに詳しく分析すると、「空間線量率の上がったブロックと下がったブロックが隣接する」「東西方向に帯状に空間線量率の変動が大きいエリアがある」などの特徴はありますが、今のところ、原因を特定できる決め手(特徴)を見つけ出すことはできていません。ただ、「ウェザリング効果は単純ではなく、一律な効果を仮定して空間線量率の低下を期待することはできない」ことは、今回の測定で明らかになりました。測定を継続してきた成果であるとともに、今後も測定を継続する必要性が示されたと言えます。

## 「地域」をとりもどす

(伊那市 小牧 崇)



「日本をとりもどす」というテーマを耳にした時、この「日本」にどんな思いが詰まっているのか、人によってずいぶん違ってくるのだらうなと思った。私は日本というよりも「ふるさと」そして「地域」とことばを転換してようやく胸に落ちたのだが……。原発再稼働もアベノミクスもリニアも TPP も、そして改憲の先にある軍拡も、中央のお偉いさんたちに都合良いもの。地域でささやかに暮らす庶民には、厄災以外の何物でもない。今、中央から発せられるこうした流れに、**No!** の声を上げること。私たちの手で豊かな地域をとりもどすことが求められている。そのために何から手を付けていけばよいのか。そのヒントが「マルシェ(市場)」にあるのではないか。以下、伊那で取り組まれている「虹の市」について紹介したい。

鎌仲ひとみ作品の上映会を企画したり、ごみ問題を一緒に取り組んだ仲間が、5年ぐらい前から、「ごみを出さないために不用品の交換や、安心な手づくり食品をやり取りするフリーマーケットを開きたい」と準備を始めた。2010年7月、一回目の「虹の市」を開く。その後も順調に回を重ね、先日の市で15回目を数えた。出店品は、有機野菜・野草茶・手作り菓子をはじめ、手づくりパン・味噌・雑貨等。時には、「ミニソーラー発電装置手づくり講座」があったり、地元ミュージシャンのコンサートがあったりする。

最初は、原発問題やごみ問題の展示も行っていた。これは続かなかったが、それはそれでよし。地域の中に、自分たちのやり方で、ヒトとモノがゆったりと交流する場があることが、地域をとりもどすことに何処かでつながるだろうと思うのだ。今年はあと2回、8月31日と11月9日に開催します。伊那市高遠町のさくらホテルを目指してお出かけください。

## 「不戦ネット」の出番かな・・・

(金安 弘) \* \* \* \* \*

【その1】母が一人で住む僕の実家は、東京電力の柏崎・刈羽原発から20キロ地点にあります。2007年7月16日、お昼ころやっと母と通話できました。「今、火災が起きてるって。私はここから動かないよ。私はだいじょうぶ。」で切れました。その3年前の中越地震に続き、今度は中越沖地震でした。「送電線は切断され、発電所内で何ヶ所も陥没している」と、ニュースで知りました。それから4年後の3.11。「何かあったら長岡を離れようよ。」と問う息子に、母はあいかわらず「ここから動かないよ。」です。東京電力は、柏崎原発の再稼働をあきらめません。8月24日、「なくそう原発・柏崎大集会」に参加してきます。91歳の母は、「外でより、ここで死んだ方がまし。」と思いつけています。

【その2】今から60年前、1954年7月1日、自衛隊が発足しました。60年後の今年7月1日、この自衛隊創立記念日に、安倍政権は、根本的に自衛隊の性格を変えるための法制改憲に向けた宣言、すなわち「集団的自衛権の行使容認」を閣議決定しました。他国のために海外で武力行使することは、自衛隊法の第3条、自衛隊の任務に違反します。入隊する自衛隊員の宣誓書には、「他国のために命をかける」という言葉などありません。従って、安倍政権は、自衛隊に関する法律をすべて変えなければなりません。改悪してから、12月の「日米防衛協力に関する指針」の改定に進むとの方針は、12月再改定後と変わり、さらに最悪の選択を安倍政権はしたことになります。なぜなら、日本の法律を変える前に、アメリカの要求を受け入れ、それに合わせて作らざるを得ないからです。やっぱりこれから「不戦ネット」の出番かな・・・と思っています。

## 記憶として 記録として (伊藤 廣昭)

先日、会場で話し終えた後で、突然思い出したことがありました。なぜか、それを書いてみたいと思いました。

私がまだ大学生だった頃？、米国のカリフォルニア州でだったかと思いますが、「広大な土地で酒米を作り、それを材料にして日本酒を造った」という記事が雑誌に載っていました。某大手酒造メーカーが、日本国内での販売まで行ったはずでした。

その雑誌には、別の欄に日本と米国の農業コストを比較する記事が併載されており、そこには、「米国でかかるコストは、日本の約1/13」と記されていたと記憶しています。単純に計算すれば、米国で作った米の1年分の利益は、日本の13年分のそれにも該当するのです。

何も無い無辺の大地を開拓、灌漑し大規模な水田を作り、種籾は飛行機で播く。刈り取りは大型のコンバインで、一気に収穫を終わらせる。それを、工場で製品として加工し輸出する。今の日本の指導者が、農協を解体し目指そうとしているのは、あるいはそんな姿なのかもしれません…。

カリフォルニアでの米の栽培は、その後継続できなかつたと記憶しています。乾燥した気候下での栽培は、大量の水を地下深くからくみ上げざるを得ず、刈り取った後の地表面には、土中の塩分が結晶化して現れました。その為、継続的な栽培ができなくなったのです。

フロー型経済を農業に当てはめた最大の弱点が、ここに現れています。

一体、何年栽培・収穫できたのでしょうか？ 2年でしょうか、3年でしょうか？ 塩の吹き出た大地、その後何も産むことができない荒地になってしまったものと思われます。

今、私たちのふるさととは、かの地と同様になろうとしています。かの地と同様にしようとしています。一時の利益の為に犠牲とするモノは何なのか、蓄積し続けるモノは何なののでしょうか？ 無責任という名の短絡的な判断で…。

今宵は、港の方から花火の揚がるのが望めます。遠い花火です。

私のふるさとで唯一誇れる祭り、「相馬野馬追」がほどなく始まる季節です。私の町でも「火の祭り」と称して、この時には少ないながらも花火が打ち上げられます。

打ち上げる前に、協賛してくれた会社の名前が朗々と読み上げられ、感謝の意を表します。

風に乗って遠く近く響く、それは次の打ち上げまでの間、子ども心には待ち遠しい想いばかりを感じさせていましたが、今ではなつかしい余韻として心の中に蘇ってきます。花火の後の煙が風に流れることを教えながら…。

原発が持ち込まれ、半世紀近くを経て起こった事故は、世界中にその名を轟かせてしまいました。“FUKUSHIMA”と。県内には、時代の激流に翻弄されながらも、その名を記憶され続ける会津があります。

歴史には、その時々の強者が自己保全の為、その時々の勝手な理論で記録を残そうとします。残されています。

でも歴史では、私たちの記憶までは消す事ができないものであることを忘れていません。

そして、忘れるべきではないものとして語り続けなければなりません。



## 事務局便り

「たった一回の原発事故で」を寄贈する…出版元の地湧社から電話。感謝。事務所に 2 冊だけ残っていたその本を手にした。1990 年にウクライナ現地で文通を呼びかけ、そして届いた手紙の一部を、1993 年に出版したものだ。事故後に次々と病気に罹り、病気の束となっていく我が子への親の悲しみ・苦しみがほとばしる。「チェルノブイリの災いを、二度とどこでも繰り返さないように！ 皆さんの子どもと孫に幸せと健康ときれいな空気と新鮮なパンと澄み切った水がありますように！ そして何の不幸も訪れませんように！」と書く母親。「喜んだり泣いたりしながら暮らしています。でもきっとよくなることを信じています」…諦めず、絶望に身を委ねまいとする親の思いが痛いほど伝わる。そして、事故後 4 年目までのウクライナで、事故が何をもたらしたのかを伝えている。今こそ、たくさんの日本の人々に読んでほしい。(山盛)

## 「たった一回の原発事故で(本体 500 円)」を販売します !!

1993 年に出版されたこの本(右写真)を、地湧社さんのご厚意で再び皆さんに読んでいただけます。チェルノブイリ原発事故後のウクライナに住んでいた、普通の母親達から、日本の私たちに届けられた手紙を冊子にしたものです。

我が子が病に苦しむ姿を見守り、心を痛める 107 人の母の思い…心からの手紙集です。心が折れそうなとき、手を差し伸べて支えてくれる友人がいると知ったとき、どんなにか心強かった事でしょう。ウクライナの母たちがどんな想いでこの手紙を託したか…。

「事故後」の悲劇を繰り返さないために、日本の私たちは今、何をすべきでしょうか。(美)



## 編集後記

- ☆小さじ 1 は 5cc ! ということに気づいたのはつい最近。ずっと 2.5cc だと思っていた。家庭科の授業をまじめに聞いていなかったせいかな? どうりで自分の作る料理は薄味のはず。今まで不足していた塩分を取り戻す? いやいや取り戻す のはマツリゴト。(佳)
- ☆まだまだ社会情勢が怪しいウクライナ。秋の代表団日程が決められないという問題が発生中。実は私、スタツアを含め現地へは 10 回以上訪問している。なんと来月、郡山の若い母親達に、体験談を話し疑問に答える会に参加することに…。まずは、診療所の薬棚と往診カバンの話からかな。(美)
- ☆2014 年 7 月 15 日、世界は遂にターニングポイントを迎えた。BRICS (ブラジル・ロシア・インド・中国・南アフリカ) が、「世界銀行」に相当する「新開発銀行」、「IMF (国際通貨基金)」に相当する「外貨準備基金」を共同で設立することに合意したのだ。BRICS は、世界の人口の約 40%、世界の GDP の約 30% を占める、極めて大きな市場を有している。この新しい金融機関は、「実態経済に裏付けられたお金」をベースとして運用される。この機関が動き出すと、今まで自分達が勝手に作り出す「実態のないお金(米ドル)」で支配してきた「金融マフィア」たちは、大打撃を受ける(世界中の国から相手にされなくなる)ことになる。今、中東・極東・ウクライナでは、今までの金融支配(米連銀による石油/ドル本位制)の崩壊を阻止するため、彼等の最後のあがきが仕掛けられている。東ウクライナで起きた「マレーシア航空機墜落事件」もその 1 つである。(J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

印刷「エープリント」

TEL・FAX (052) 871-9473